女性研究者の子育ての負担について

荻野綱男

女性は、子育てのため、研究者としての成長の最も大事な時期である三十代に思うような研究ができない。といってしまうとおおげさであるが、実際、この時期は論文の生産が男性に比べてさがってしまう。

荻野が日本語研究分野で一九五三年から一九八四年までに論文を書いた男性研究者千人以上、女性研究者百人以上について調べた結果では、二十六歳から四十二歳までの男女別論文生産性（研究者一人が一年間で書く論文の数）は表1の通りであり、その前後の時期は男女差があまりないものの、二十七歳から四十一歳までの女性の論文生産性は男性の七割程度に下がってしまう。この数値の詳細は、東京都立大学『日本語研究』十三号（一九九二・十二）に収録された荻野の論文「男性日本語研究者は女性より多くの論文を書くか」を参照していただきたい。

この結果をどのように解釈するべきだろうか。ごく普通に考えられるところでは、これは女性研究者が子育てに時間を割かれるためであろう。もちろん、個々の論文執筆者が結婚しているかどうか、子供を持っているかどうかまではわからない。しかし、このように多くの人の全体を見るならば、いわゆる平均的な人生が出てくるはずである。このデータは数十年前を含むのであるから、この時期の

女性研究者は子供を育てている比率が現在以上に高かったと考えられる。また、「子育て」ということばには広く家事全般を含めて考えたほうがよい。子供に対しては、乳児時代に手間がかかるだけでなく、幼児から小学生、中学生、高校生と、成長に連れてその時期なりのもろもろの用事があるものであり、それを含めて「子育て」と考えるべきである。四十歳過ぎからは、そのような負担が少なくなるのであろう。

潜在的論文生産能力（これから書くであろう論文の数）と論文生産結果（実際に書いた論文の数）の関係を考えた場合、男性がイコールであるとすると、三十代の女性の論文生産結果は潜在的論文生産能力の七割ということになる。

さて、このような男女差があることが明らかになったことで、次の問題が生じる。研究者の研究能力を評価する場合、どのようにすれば公平になるかという問題である。本来は、個々の研究者の潜在的論文生産能力を評価するべきであるが、それは現実に不可能であるので、論文生産結果で評価するしかない。研究者の採用人事や各種の研究費の配分において、研究者評価のプロセスは公平に行なわれていると信ずるが、なお、研究者の間に書かれた論文の数において差があるとき、少ないほうが一般に不利になることは否めない。

そのような状況の中で、三十代の女性研究者を評価する場合、男性とまったく同じ基準で、男性と並べて評価していいのだろうか。そのような女性研究者は、子育ての時期が終わったあとでは、それまで以上に研究が進展することが期待できる。

四十歳過ぎの女性研究者を評価する場合でも、「過去五年間の論文」を判断基準として採用するなら問題は少ないが、その人の過去の論文の全体を判断基準にすると、場合によって女性研究者は若干不利になることがあるのではないか。

表1　26歳から42歳までの男女別論文生産性

年齢	男性	女性	女性/男性
26	0.265	0.305	1.151
27	0.328	0.250	0.762
28	0.375	0.312	0.832
29	0.465	0.297	0.639
30	0.525	0.359	0.684
31	0.526	0.349	0.663
32	0.553	0.462	0.835
33	0.590	0.391	0.663
34	0.689	0.406	0.589
35	0.761	0.457	0.601
36	0.775	0.444	0.573
37	0.774	0.492	0.636
38	0.780	0.587	0.753
39	0.769	0.590	0.767
40	0.815	0.661	0.811
41	0.844	0.539	0.639
42	0.856	0.982	1.147

単純に、子持ちの女性の研究能力を一・五倍に補正すればよいわけではないが、もしも論文生産結果だけを基準にして、女性の研究能力を低く考える向きがあるとすれば、それはそう簡単な話ではないといいたい。

いうまでもないが、ここでは書かれた論文の質を問題にしているわけではない。「論文の質」は重大な問題であるが、容観的にそれを測定することが不可能な以上、量的な判断だけで議論を進めた。

――筑波大学助教授――

（平成五年三月二日　受理）
（平成五年四月一日　改稿受理）